（２）　水　　稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
1 ばか苗病 *Gibberella fujikuroi* ごま葉枯病 *Cochliobolus miyabeanus* いもち病 *Pyricularia oryzae* （種子消毒）	1.種籾は、ばか苗病、ごま葉枯病、いもち病の発生の少ない圃場から採種する。 2.塩水選を行う。 ・うるち：ボーメ比重1.13 （水10ﾘｯﾄﾙ当たり食塩2.6kg） ・もち：ボーメ比重1.08 （水10ﾘｯﾄﾙ当たり食塩1.6kg） 3.ばか苗病、いもち病は温湯種子消毒をする（普通作物参考６参照）。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●浸種前（湿粉衣） 1.塩水選後、十分に水洗・水切りした後に乾かす。種籾重量の約３％の水を添加し適度に湿らせた状態で薬剤を粉衣する（普通作物参考１参照）。 2.薬剤は均一に付着させた後、日陰で十分に乾燥し、固着させる。 3.浸種は、粉衣処理した籾量の２倍の水で浸漬し、24時間は水を取り替えず撹拌しない。 4.トリフミンの処理により、初期生育が遅延することがあるが、回復するので通常の管理を維持する。 5.タフブロックはばか苗病、いもち病に登録がある。 6.タフブロックＳＰは苗立枯病（フザリウム菌、リゾープス菌、トリコデルマ菌）に登録がある。 ●浸種前（浸漬処理） 1.薬液と種子は容量で1：1とし、薬液に種子を浸漬する。 2.消毒中、液温は15℃以下にならないようにする。 3.消毒後は水洗いしない。 4.テクリードＣフロアブルを亜鉛製の器具では使用しない。 5.水和剤を使用する場合は消毒中に沈殿するので数回攪拌する。消毒後は水洗いせずに種籾が十分乾くまで陰干する。 6.トリフミン乳剤、スポルタック乳剤、ヘルシード乳剤、ヘルシードＴフロアブル、テクリードＣフロアブルは、消毒中の撹拌と消毒後の陰干はしなくてよい。 7.浸種は、種籾量の約２倍の水に浸し、24時間は水を取り替えず、撹拌しない。 8.トリフミン乳剤・水和剤、スポルタック乳剤、ヘルシード乳剤、ヘルシードＴフロアブル、テクリードＣフロアブルの処理により、初期生育が遅延することがあるが、回復するので通常の管理を維持する。 9.種子消毒剤の廃液については、周辺環境に対する影響を及ぼさないよう、中和、加水分解、酸化、還元その他の方法により適正に処理する。 10.一度に大量の種子消毒剤の廃液が生じる場合には、廃液専用の処理装置を設置し、適正に処理する。 11.エコホープＤＪ、タフブロックはばか苗病、いもち病に登録がある。 12.タフブロックは苗立枯病（フザリウム菌、リゾープス菌、トリコデルマ菌）に登録がある。 ●浸種前（種子吹付処理） 1.所定の希釈液を乾燥籾１kgに対して所定量を使用する。 2.専用の種子消毒機を使用し、種籾に均一に付着させて乾燥させる。 3.タフブロックＳＰはばか苗病、いもち病に登録がある。 4.タフブロックＳＰは苗立枯病（フザリウム菌、リゾープス菌、トリコデルマ菌）に登録がある。 ●浸種前（種子塗沫処理） 1.所定の希釈倍数液を乾燥籾１kgに対して所定量を使用する。 2.適当な容器内で種籾を撹拌しながら、薬液を滴下するなどして種籾に均一に付着させる。 3.タフブロックＳＰはばか苗病、いもち病に登録がある。 4.タフブロックＳＰは苗立枯病（フザリウム菌、リゾープス菌、トリコデルマ菌）に登録がある。	浸種前 （湿粉衣）	3 BM2 M3･1 M1･12･3	トリフミン水和剤 （生）タフブロック （混）ベンレートＴ水和剤２０ （混）モミガードＣ水和剤 このほか以上を含む混合剤
		浸種前 (高濃度短時間 浸漬処理)	3 3 3 3 BM2 M3･1 M1･3 M3･3	トリフミン乳剤 トリフミン水和剤 スポルタック乳剤 ヘルシード乳剤 （生）タフブロック （混）ベンレートＴ水和剤２０ （混）テクリードＣフロアブル （混）ヘルシードＴフロアブル このほか以上を含む混合剤
		浸種前 (低濃度長時間 浸漬処理)	3 3 3 3 BM2 BM2 M1･3 M3･3 M1･12･3 M1･12･3	トリフミン乳剤 トリフミン水和剤 スポルタック乳剤 ヘルシード乳剤 （生）エコホープＤＪ （生）タフブロック （混）テクリードＣフロアブル （混）ヘルシードＴフロアブル （混）モミガードＣ水和剤 （混）モミガードＣ・ＤＦ このほか以上を含む混合剤
		浸種前 (種子吹付処理)	3 3 3 3 BM2 M3･1 M1･3 M3･3 M1･12･3 M1･12･3	トリフミン乳剤 トリフミン水和剤 スポルタック乳剤 ヘルシード乳剤 （生）タフブロックＳＰ （混）ベンレートＴ水和剤２０ （混）テクリードＣフロアブル （混）ヘルシードＴフロアブル （混）モミガードＣ水和剤 （混）モミガードＣ・ＤＦ このほか以上を含む混合剤
		浸種前 (種子塗沫処理)	3 3 3 M3 BM2 M3･1 M1･3 M3･3 M1･12･3 M1･12･3	トリフミン乳剤 スポルタック乳剤 ヘルシード乳剤 キヒゲンＲ－２フロアブル （生）タフブロックＳＰ （混）ベンレートＴ水和剤２０ （混）テクリードＣフロアブル （混）ヘルシードＴフロアブル （混）モミガードＣ水和剤 （混）モミガードＣ・ＤＦ このほか以上を含む混合剤

農薬の使用方法や注意事項はラベルで確認する

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
2 心枯線虫病 *Aphelenchoides besseyi* （種子消毒） （本田防除）	1.発病があった圃場からは、採種しない。 2.黒点米の発生田からは、採種しない。 3.温湯種子消毒をする（普通作物参考６参照）。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.浸漬処理は、薬液と種子は容量で１：１として所定時間浸漬する。消毒中、液温は15℃以下にならないようにする。 2.吹付処理は、ばか苗病等の種子消毒の注意事項参照。	浸種前 （浸漬処理）	1B	スミチオン乳剤
		浸種前 （種子吹付処理）	1B	スミチオン乳剤
		移植前 育苗箱処理	1A 1B	オンコル粒剤５ スミチオン乳剤 このほか以上を含む混合剤
		穂揃期	1B	スミチオン乳剤
3 苗立枯病 *Fusarium* spp. *Phytopythium litorale* *Pythium* spp. *Rhizopus* spp. *Trichoderma viride* *Mucor fragilis* *Phoma* sp.	1.畑作跡の土の使用を避ける。 2.リゾプス菌は、30℃以上になると発病しやすいので出芽時の温度管理には注意する。なお、古むしろ等の使用を避ける。 3.トリコデルマ菌は、25～30℃で出芽期間の長い場合に発生が多い。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●浸種前（種子吹付処理） 1.所定の希釈液を乾燥籾１kgに対して所定量を使用する。 2.専用の種子消毒機を使用し、種籾に均一に付着させて乾燥させる。 3.モミガードＣ・ＤＦはフザリウム菌、トリコデルマ菌に有効である。 ●播種前（育苗用資材の消毒） 1.育苗箱を瞬間浸漬するか、またはジョウロで十分散布する。 2.やむをえず、保温用古むしろを用いる場合は、ケミクロンG5,000倍液をジョウロで十分にかける。 3.消毒作業は日かげで行い、金属類を使用した場合は必ずよく水洗いをする。 4.本剤取扱上の注意はⅢ－１５.農業用資材の消毒の項を参照。 ●播種前、播種時及び発病初期 1.育苗マット等の保水性の高い資材を使用する場合は液剤を使用する。 2.タチガレン、タチガレエースMはフザリウム菌とピシウム菌に、ダコニールはリゾープス菌（白カビ）に有効である。ダコレートはリゾープス菌、トリコデルマ菌、フザリウム菌に有効である。バリダシンはリゾクトニア菌、白絹病菌に有効である。キヒゲンＲ－２フロアブルはピシウム菌に有効である。	浸種前 （浸漬処理）	M1･12･3	（混）モミガードＣ・ＤＦ
		浸種前 （種子吹付処理）	M1･12･3	（混）モミガードＣ・ＤＦ
		播種前 （種子塗沫処理）	M3	キヒゲンＲ－２フロアブル
		播種前 （育苗用資材の消毒）	－ －	ケミクロンG イチバン乳剤
		播種前 （床土混和）	32 32･4	タチガレン粉剤 （混）タチガレエースＭ粉剤 このほか以上を含む混合剤
		播種時	1 U17	ベンレート水和剤 ナエファインフロアブル
		播種時～ 緑化期	M5 M5･1	ダコニール１０００ （混）ダコレート水和剤
		播種時～ 発病初期	32 U18 32･4	タチガレン液剤 バリダシン液剤５ （混）タチガレエースＭ液剤 このほか以上を含む混合剤
4 いもち病 *Pyricularia oryzae* （葉いもち）	1.育苗期に窒素質肥料を過用しない。 2.病苗は本田に植えない。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.フジワン粒剤は緑化始期に使用するとムレ苗防止に効果がある。 2.いもち病の対策は普通作物参考２を参照。	移植前 育苗箱処理	6 P2 P2 P2 P2 P3 P3 P3 P3 P3 P3 P8 16.1 16.1 16.3	フジワン粒剤 オリゼメート粒剤 Ｄｒ．オリゼ箱粒剤 ファーストオリゼ箱粒剤 ビルダー粒剤混合剤 ブイゲット箱粒剤 ブイゲットフロアブル ルーチン粒剤 ルーチンフロアブル ルーチン箱粒剤混合剤 スタウト箱粒剤混合剤 ブーン箱粒剤 ビーム粒剤 デジタルコラトップ箱粒剤混合剤 ゴウケツ箱粒剤混合剤 このほか以上を含む混合剤
		播種後覆土前	24	カスミン液剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除		
		防除時期	RACコード	薬剤
	1.本田に珪カルまたは含鉄資材を施用する。 2.合理的な水管理を行い、健全な生育を図る。 3.本田肥料は基肥、穂肥を主体とし、分げつ期には施用しないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.粒剤の施用は、３cm以上の湛水状態で均一に散布し、施用後少なくとも１週間以上は、落水とかけ流しはしない。 2.オリブライト１キロ粒剤・２５０Ｇは急激な温度上昇がおこる気象条件下では、葉に褐点を生じやすいので注意する。 3.いもち病多発地帯では、耐性菌回避のため同一系統の薬剤を連用しない。 4.いもち病抵抗性品種については、普通作物参考２参照。 5.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。	生育期 初発前～初発頃	1 6 6 6 6 11 11 11 16.1 16.1 16.1 16.1 16.1 16.1 16.1 16.3 24 24 52 U16 P2 P2 11・ー 24・16.1 U14・16.1 U14・16.1 U14・16.1 U14・16.1	トップジンフロアブル混合剤 フジワン乳剤 フジワン粒剤 フジワン１キロ粒剤 フジワンパック オリブライト２５０Ｇ アミスターＳＥ混合剤 アミスターＳＣ混合剤 ラブサイドフロアブル ラブサイド粉剤ＤＬ ビーム粉剤ＤＬ コラトップ粒剤５ コラトップ１キロ粒剤１２ コラトップジャンボＰ コラトップ豆つぶ ゴウケツパック カスミン液剤 カスミン粉剤混合剤 アイーナ20フロアブル トライフロアブル オリゼメート粒剤 オリゼメート1キロ粒剤 ワイドパンチ豆つぶ (混)ダブルカットフロアブル (混)ブラシン水和剤混合剤 (混)ブラシンフロアブル (混)ブラシン粉剤ＤＬ (混)ノンブラスフロアブル このほか以上を含む混合剤
（穂いもち）	1.合理的な水管理を行い、健全な生育を図る。 2.穂肥の施用量は稲の状態、天候等を考慮して適量をこえないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●出穂前 1.粒剤の施用は、３cm以上の湛水状態で均一に散布し、施用後は少なくとも１週間以上は、落水やかけ流しはしない。 2.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。 ●出穂直前～穂揃期 1.穂揃期以降も雨天が続き、多発が予想され、なお防除が必要なときは、穂揃期の10日後までに散布する。穂揃期の15～20日以後の散布は効果が低い。	出穂前	6 6 6 16.1 16.1 16.1 16.1 16.3 16.3 52 P2 P2	フジワン粒剤 フジワン１キロ粒剤 フジワンパック コラトップ粒剤５ コラトップ１キロ粒剤１２ コラトップジャンボＰ コラトップ豆つぶ サンブラス粒剤 ゴウケツ粒剤 アイーナ20フロアブル オリゼメート粒剤 オリゼメート1キロ粒剤 このほか以上を含む混合剤
		出穂直前	6 11 11 16.1 16.1 16.1 24 24 52 U16 24・16.1 24・16.1 U14・16.1 U14・16.1 U14・16.1 U14・16.1	フジワン乳剤 アミスターＳＥ混合剤 アミスターＳＣ混合剤 ラブサイドフロアブル ラブサイド粉剤ＤＬ ビーム粉剤ＤＬ カスミン液剤 カスミン粉剤混合剤 アイーナ20フロアブル トライフロアブル （混）ダブルカット粉剤ＤＬ (混)ダブルカットフロアブル (混)ブラシン水和剤混合剤 (混)ブラシンフロアブル (混)ブラシン粉剤ＤＬ (混)ノンブラスフロアブル このほか以上を含む混合剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
5 紋枯病 *Thanatephorus cucumeris*	1.施肥、水管理を適正に行い、稲の生育が過剰繁茂にならないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●早期・短期：出穂15～10日前 普通期：出穂25～15日前 1.粒剤の施用は、３㎝以上の湛水状態で均一に散布し、施用後は少なくとも１週間以上は、落水やかけ流しはしない。 2.紋枯病が垂直進展期に入る出穂期直前以降では効力が低下する。 3.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。 ●出穂期頃 1.株全体に均一にかかるように、ていねいに散布する。 2.多発生が予想されるときは、出穂直前にも散布する。 3.出穂後まん延の兆しがみえ、散布の必要を認めた場合は遅くとも出穂10日後までに散布する。 4.防除の目安：普通期栽培では出穂20日前で、発病株率10～20%、出穂10日前で発病株率25%である。	移植前 育苗箱処理	7 7 7 7	リンバー箱粒剤 グレータム箱粒剤 エバーゴル箱粒剤 モンガレス箱粒剤 このほか以上を含む混合剤
		早期･短期 ：出穂15～ 10日前 普通期 ：出穂25～ 15日前	3 7 7 7 11 11	モンガリット粒剤 モンカット粒剤 リンバー粒剤 リンバー１キロ粒剤 オリブライト１キロ粒剤 オリブライト２５０Ｇ このほか以上を含む混合剤
		早期･短期 ：出穂５日前 ～出穂期 普通期 ：出穂15 ～５日前	7 7 7 7 7 11 11 20 20 U18 U18 U18	バシタック水和剤７５ バシタックゾル モンカット水和剤 モンカットフロアブル モンカットファイン粉剤２０ＤＬ アミスターＳＥ混合剤 アミスターＳＣ混合剤 モンセレンフロアブル モンセレン粉剤ＤＬ バリダシン液剤５ バリダシン粉剤ＤＬ バリダシンフロアブル混合剤
6 ごま葉枯病 (穂枯れ) *Cochliobolus miyabeanus*	1.本田に珪カルや含鉄資材を施用する。 2.水管理に注意して根ぐされを防止する。 3.肥料の分施割合に注意し、出穂後の極端な肥料切れを起こさないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●播種前～移植当日 1.嵐箱粒剤の播種前処理は育苗箱の床土に均一に混和し、播種時処理は育苗箱の上から均一に散布する。 ●葉のごま葉枯病、穂枯れ 1.ブラシンフロアブル・粉剤DL、ノンブラスフロアブルは変色米にも登録がある。 2.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。	播種前 ～移植当日	P2 P3 P3 P8	Ｄｒ．オリゼ箱粒剤 ルーチン粒剤 スタウト箱粒剤混合剤 ブーン箱粒剤 このほか以上を含む混合剤
		葉のごま葉枯病 ：幼穂形成期 ～穂ばらみ期 穂枯れ ：穂揃期～乳熟 期１～２回	3 11 11 16.1 U16 U14･16.1 U14･16.1 U14･16.1 U14･16.1	モンガリット粒剤 オリブライト１キロ粒剤 アミスターエイト ビーム粉剤ＤＬ トライフロアブル (混)ブラシンフロアブル (混)ブラシン水和剤混合剤 (混)ブラシン粉剤ＤＬ (混)ノンブラスフロアブル このほか以上を含む混合剤
7 もみ枯細菌病 *Burkholderia glumae* *B.gladioli*	1.発病圃場から採種しない。やむを得ず採種する場合は、先に健全なか所を刈取り、採種する。 2.風選を十分に行う。 3.比重1.13以上で塩水選を行い、保菌籾を除去する。 4.苗腐敗症は高温（30℃以上）で出芽期間が長い場合に発生が多いので、出芽時の温度管理に注意する。 5.苗床面の凹部に苗腐敗症が発生しやすいので、播種時に苗床面を均平にする。 6.深水や冠水状態になると発病が多くなるので移植直後や直播栽培では浅水とする。 7.発病のひどいか所は刈取前に取り除き、堆肥にする。 8.発病圃地の籾がら、稲わらは処分する。 9.温湯種子消毒をする（普通作物参考６参照）。	浸種前 （湿粉衣）	31 BM2 M3･1 M1･12･3	スターナ水和剤 （生）タフブロック (混)ベンレートＴ水和剤２０ (混)モミガードＣ水和剤 このほか以上を含む混合剤
		浸種前 （浸漬処理）	31 31 BM2 BM2 M1･3 M3･3 M1･12･3 M1･12･3 －	スターナ水和剤 スターナＳＥ混合剤 （生）エコホープＤＪ （生）タフブロック (混)テクリードＣフロアブル (混)ヘルシードＴフロアブル (混)モミガードＣ水和剤 (混)モミガードＣ・ＤＦ シードラック水和剤 このほか以上を含む混合剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
	〈薬剤使用の特記事項〉 ●浸種前（湿粉衣） 1.ばか苗病等の注意事項を参照。（普通作物参考１参照） ●浸種前（浸漬処理） 1.ばか苗病等の注意事項を参照。 ●浸種前（種子吹付処理） 1.専用の種子消毒機を使用する。 ●播種前（苗腐敗症対策） 1.育苗培土に均一に混和する。 ●出穂前 1.オリゼメート粒剤は穂枯れにも登録がある。 ●出穂期 1.出穂期に高温で適度の雨があると発生しやすいので、穂揃期までに散布する。	浸種前 （種子吹付処理）	31 31 BM2 M1･3 M3･1 M1･12･3 M1･12･3	スターナ水和剤 スターナＳＥ混合剤 （生）タフブロックＳＰ （混）テクリードＣフロアブル （混）ベンレートＴ水和剤２０ （混）モミガードＣ水和剤 （混）モミガードＣ・ＤＦ このほか以上を含む混合剤
		浸種前 （種子塗沫処理）	31 31 BM2 M1･3 M3･1 M1･12･3 M1･12･3	スターナ水和剤 スターナＳＥ混合剤 （生）タフブロックＳＰ （混）テクリードＣフロアブル （混）ベンレートＴ水和剤２０ （混）モミガードＣ水和剤 （混）モミガードＣ・ＤＦ このほか以上を含む混合剤
		播種前 （苗腐敗症対策）	24 P3 P3	カスミン粒剤 ルーチン箱粒剤混合剤 スタウト箱粒剤混合剤
		播種後覆土前	24 P3 P3	カスミン液剤 ルーチン箱粒剤混合剤 スタウト箱粒剤混合剤
		移植前 育苗箱処理	16.3 P2 P2 P2 P3 P3 P8	ゴウケツ箱粒剤混合剤 オリゼメート粒剤 Ｄｒ．オリゼ箱粒剤 ビルダー粒剤混合剤 ルーチン粒剤 スタウト箱粒剤混合剤 ブーン箱粒剤 このほか以上を含む混合剤
		出穂前	P2 P2 16.1 16.3 16.3	オリゼメート粒剤 オリゼメート１キロ粒剤 コラトップ粒剤５ ゴウケツ粒剤 ゴウケツパック このほか以上を含む混合剤
		出穂期	24･16.1 24･16.1 U14･16.1	（混）カスラブサイド粉剤３ＤＬ （混）ダブルカット粉剤３ＤＬ （混）ブラシンフロアブル このほか以上を含む混合剤
8 内穎褐変病 *Pantoea ananatis*	1.穂肥施用期の窒素の多用は発生を助長するので、窒素過多にならないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.出穂期に高温で適度の雨があると発生しやすいので、穂揃期までに散布する。	移植前 育苗箱処理	P2 P2	Ｄｒ．オリゼ箱粒剤混合剤 ビルダー粒剤混合剤
		播種前 ～移植当日	P3 P3	ルーチン粒剤 スタウト箱粒剤混合剤
		出穂前	16.3 16.3	ゴウケツ粒剤 ゴウケツパック
		出穂期	24･16.1 24･16.1 U14･16.1	（混）カスラブサイド粉剤３ＤＬ （混）ダブルカット粉剤３ＤＬ （混）ブラシン粉剤ＤＬ このほか以上を含む混合剤

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
9 稲こうじ病 *Villosiclava virens*	1.多肥栽培を避ける。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.穂ばらみ期から出穂期にかけて雨が多いと多発しやすいので、その時期の散布が効果的である。 2.ブラシンフロアブル・粉剤DL、ラブサイドベフラン、イモチエース粒剤は変色米にも登録がある。	穂ばらみ期	6	フジワン粒剤
			6	フジワンパック
			M1	ドイツボルドーA
			11	オリブライト250G
		穂ばらみ期 ～穂揃期	1	トップジンフロアブル混合剤
			3	モンガリット粒剤
			6	フジワン乳剤
			11	アミスターエイト
			U14･16.1	(混)ブラシンフロアブル
			U14･16.1	(混)ブラシン粉剤DL
				このほか以上を含む混合剤
10 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ＲＳＶ	1.常習発生地帯では冬期（２月上～下旬）に水田を耕起するとともに春期（４月中旬、５月上旬）に雑草を処理する。 2.本田初期の発病株は抜き取って処分する。 3.早期栽培では次の点に留意する。 ・移植期を揃える。 ・圃場の集団化を図る。 ・育苗は周囲に寒冷紗をはってウンカ・ヨコバイの飛来を防ぐ。 ・収穫後は耕うんして刈株を処理し、ひこばえの発生を防ぐ。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●新種前(種子吹付処理または塗沫処理) 1.ばか苗等の種子消毒の注意事項を参照。 ●移植前、育苗箱処理 1.萎縮病、縞葉枯病発生地帯では原則として粒剤の箱施用を行う。ただし、老化苗及び軟弱徒長苗では薬害のおそれがあるので注意する。 2.茎葉に付着した薬剤はていねいに払い落してから田植機にかける。なお、茎葉がぬれているときの使用は避ける。 3.植付苗の株元が水面から露出すると薬害のおそれがあるので代かき面を均平にする。 4.移植後は直ちに入水し、水深を２～３cmとし深水にしない。 5.強還元田、漏水田での使用は避け、移植後、気象条件の悪化で活着不良、生育障害の起きるおそれのあるときは使用しない。 6.プリンス粒剤、スターダム箱粒剤は、ツマグロヨコバイには登録がない。 ●直まき栽培、播種前（湿粉衣） 1.過酸化カルシウム剤と同時湿粉衣する。 ●直まき栽培：発芽後から１～２回、早期栽培：６月上中旬、短期栽培・普通期栽培：７月上中旬 1.縞葉枯病多発生地帯では、粒剤の箱施用と移植１か月後に防除を行う。箱施用できなかった場合は、移植直後及び移植１か月後に防除を行う。本田初期防除は一斉防除すると効果が高い。 2.直播栽培では１～２葉期に１回目を施用する。 3.アプロードは幼虫のみの登録である。 4.キラップ粒剤・フロアブル・粉剤DL・豆つぶ混合剤（ワイドパンチ豆つぶ）、アプロード粒剤はツマグロヨコバイに登録がない。 5.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。	浸種前 (種子吹付処理または塗沫処理)	4E	ルミスパンスFS
ツマグロヨコバイ 萎縮病 ＲＤＶ 黄萎病 *Phytoplasma*		移植前 育苗箱処理	1A	ガゼット粒剤
			1A	オンコル粒剤５
			1A	グランドオンコル粒剤
			2B	プリンス粒剤
			4A	アドマイヤー顆粒水和剤
			4A	アクタラ箱粒剤
			4A	ダントツ箱粒剤
			4A	ダントツ水溶剤
			4A	アルバリン箱粒剤
			4A	スタークル箱粒剤
			4A	スターダム箱粒剤
			4E	ゼクサロン箱粒剤
			4E	ペキサロンフロアブル
			4F	リディア箱粒剤
			9B	チェス粒剤
			28	パディート箱粒剤
			UN	アレス箱粒剤
			4A･5	(混)ガードナーフロアブル
			28･9B	(混)ミネクトスター顆粒水和剤
				このほか以上を含む混合剤
		直まき栽培 播種前 (湿粉衣)	4A	アドマイヤー水和剤
		直まき栽培 ：発芽後から １～２回 早期栽培 ：６月上中旬 短期栽培 ：７月上中旬 普通期栽培 ：７月上中旬	2B	キラップ粒剤
			2B	キラップフロアブル
			2B	キラップ粉剤DL
			2B	キラップ豆つぶ混合剤
			3A	トレボン粒剤
			3A	トレボン乳剤
			3A	トレボンEW
			3A	トレボン粉剤DL
			3A	なげこみトレボン
			4A	アドマイヤー水和剤
			4A	ダントツフロアブル
			4A	ダントツH粉剤DL
			4A	アルバリン粒剤
			4A	スタークル粒剤
			4A	スタークル１キロH粒剤
			4A	アルバリン顆粒水溶剤
			4A	スタークル顆粒水溶剤
			4A	スタークル液剤10
			4A	アルバリン粉剤DL
			4A	スタークル粉剤DL
			4A	スタークル豆つぶ
			4A	スタークルフロアブル混合剤
			4C	エクシードフロアブル
			4C	エクシード粉剤DL
			4F	エミリアフロアブル
			9B	プロセーバーフロアブル
			16	アプロード粒剤
			16	アプロード水和剤
			16	アプロードフロアブル
			16	アプロード粉剤DL
				このほか以上を含む混合剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
11 ニカメイチュウ （第１世代）	1.施肥管理を適正に行い、稲が過繁茂にならないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●浸種前(種子吹付処理または塗沫処理) 1.ばか苗等の種子消毒の注意事項を参照。 ●７月第４半旬 1.防除の目安：第１世代防除時期で被害茎率３～９％である。 2.ニカメイチュウは第１世代の場合、発生が少ないところでは被害茎のみられる部分の周辺散布でもよい。 3.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。	浸種前 (種子吹付処理または塗沫処理)	28	ルミビアＦＳ
		移植前 育苗箱処理	1A	グランドオンコル粒剤
			2B	プリンス粒剤
			4A	ダントツ箱粒剤
			4A	スターダム箱粒剤
			4F	リディア箱粒剤
			5	スピノエース箱粒剤
			5	ディアナ箱粒剤混合剤
			28	フェルテラ箱粒剤
			28	パディート箱粒剤
			28	ヨーバル箱粒剤
			UN	アレス箱粒剤
			28･9B	ミネクトスター顆粒水和剤
				このほか以上を含む混合剤
		７月第４半旬	3A	トレボン粒剤
			3A	なげこみトレボン
			4A	ダントツＨ粉剤ＤＬ
			4A	アルバリン粒剤
			4A	スタークル粒剤
			4A	アルバリン粉剤ＤＬ
			4A	スタークル粉剤ＤＬ
			5	ディアナＳＣ
			14	パダン粒剤４
			14	パダンＳＧ水溶剤
			18	ロムダンゾル
			18	ロムダン粉剤ＤＬ
			18	ランナー粉剤ＤＬ
				このほか以上を含む混合剤
ニカメイチュウ （第２世代）	**〈薬剤使用の特記事項〉** 1.防除の目安：第１世代末期で被害茎率1.0～3.5%、被害株率10～12%である。 2.第２世代の成虫最盛期は普通期８月第４半旬であるが、年によって変動があるので発生に注意し、適期に防除する。	８月第４半旬	4A	ダントツＨ粉剤ＤＬ
			4A	アルバリン粒剤
			4A	スタークル粒剤
			4A	アルバリン粉剤ＤＬ
			4A	スタークル粉剤ＤＬ
			5	ディアナＳＣ
			14	パダン粒剤４
			14	パダンＳＧ水溶剤
			18	ロムダンゾル
			18	ロムダン粉剤ＤＬ
			18	ランナー粉剤ＤＬ
				このほか以上を含む混合剤
12 トビイロウンカ セジロウンカ	1.密植及び窒素肥料の過用を避け、稲が過繁茂にならないようにする。 2.落水時期に注意して根を傷めないようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●浸種前(種子吹付処理または塗沫処理) 1.ばか苗等の種子消毒の注意事項を参照。 ●移植前育苗箱処理 1.オンコル粒剤５、グランドオンコル粒剤は、セジロウンカに登録がある。	浸種前 (種子吹付処理または塗沫処理)	4E	ルミスパンスＦＳ
		移植前 育苗箱処理	1A	オンコル粒剤５
			1A	グランドオンコル粒剤
			2B	プリンス粒剤
			4A	アドマイヤー顆粒水和剤
			4A	アクタラ箱粒剤
			4A	ダントツ箱粒剤
			4A	ダントツ水溶剤
			4A	アルバリン箱粒剤
			4A	スタークル箱粒剤
			4A	スターダム箱粒剤
			4E	ゼクサロン箱粒剤
			9B	チェス粒剤
			UN	アレス箱粒剤
			4A･5	(混)ガードナーフロアブル
				このほか以上を含む混合剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
	●直まき栽培、播種前（湿粉衣） 1.過酸化カルシウム剤と同時湿粉衣する。	直まき栽培 播種前 （湿粉衣）	4A	アドマイヤー水和剤
	●本田初期、７～８月 1.トビイロの防除の目安：普通期栽培の出穂20日前～穂ばらみ期（８月中下旬）は50株調査して株当たり２～５頭、穂揃期～糊熟期（９月上中旬）は25株調査して株当たり10頭。短期栽培の穂揃期～糊熟期は25株調査して株当たり10頭。 2.セジロの防除の目安：飛来成虫の産卵による葉鞘の変色に注意し、変色が目立つ圃場では、幼虫が10株当たり300頭を超える場合に防除する。 3.パイプダスターで粉剤を散布する場合はホースを水平に保ち、薬剤が株元までかかるようにする。 4.アプロードは遅効性のために幼虫のみの登録で、成虫には効果がないので注意する。 5.アプロード粒剤をトビイロウンカに使用する場合は、第２世代若齢幼虫期（普通期栽培では８月上中旬）に散布しても効果がある。 6.トビイロウンカは出穂期から乳熟期に確認防除する。この際、液剤は株元にかかりにくく、効果が低くなるので使用を避ける。 7.プロセーバーはセジロウンカを防除対象とする。 8.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。	本田初期 トビイロウンカの第２世代幼虫最盛期 普通期栽培：８月15～25日 セジロウンカの第１世代若齢幼虫期 普通期栽培：７月中下旬(移植後20日以降)	1A 2B 2B 2B 2B 3A 3A 3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4C 4C 9B 16 16 16 16 こ	バッサ粉剤混合剤 キラップ粒剤 キラップフロアブル キラップ粉剤ＤＬ キラップ豆つぶ混合剤 トレボン粒剤 トレボン乳剤 トレボンＥＷ トレボン粉剤ＤＬ なげこみトレボン ダントツ粒剤 ダントツフロアブル ダントツＨ粉剤ＤＬ アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 スタークル液剤１０ アルバリン粉剤ＤＬ スタークル粉剤ＤＬ スタークル豆つぶ エクシードフロアブル エクシード粉剤ＤＬ プロセーバーフロアブル アプロード粒剤 アプロード水和剤 アプロードフロアブル アプロード粉剤ＤＬ このほか以上を含む混合剤
13 コブノメイガ	1.移植時期の遅い作型や窒素過多田で多発するので、肥培管理理に注意する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●７月末～８月 1.コブノメイガ防除の目安：普通期栽培では８月上旬の被害株率が20%程度とする。 2.コブノメイガに出穂期前後に加害されると減収しやすいので、防除は出穂期の加害幼虫の若齢期をねらって実施する。	移植前 育苗箱処理	2B 5 5 28 28 UN 28･9B	プリンス粒剤 スピノエース箱粒剤 ディアナ箱粒剤 フェルテラ箱粒剤 パディート箱粒剤 アレス箱粒剤 ミネクトスター顆粒水和剤 このほか以上を含む混合剤
		本田初期	5 14	ディアナＳＣ パダン粒剤４ このほか以上を含む混合剤
		コブノメイガの第２世代ふ化期～若齢幼虫期 普通期栽培	3A 5 14 18 18 18	トレボンＥＷ ディアナＳＣ パダンＳＧ水溶剤 ロムダンゾル ロムダン粉剤ＤＬ ランナー粉剤ＤＬ このほか以上を含む混合剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
14 イチモンジセセリ （イネツトムシ）	1.移植時期の遅い作型や窒素過多田で多発するので、肥培管理理に注意する。	移植前 育苗箱処理	5 5 28 28 28･9B	スピノエース箱粒剤 ディアナ箱粒剤混合剤 フェルテラ箱粒剤 パディート箱粒剤 ミネクトスター顆粒水和剤 このほか以上を含む混合剤
		本田初期	5 14	ディアナSC パダン粒剤4 このほか以上を含む混合剤
		イチモンジセセリの第２世代ふ化期～若齢幼虫	5 14 18 18 18	ディアナSC パダンSG水溶剤 ロムダンゾル ロムダン粉剤DL ラナー粉剤DL このほか以上を含む混合剤
15 フタオビコヤガ （イネアオムシ）	1.中山間部に発生が多い。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●浸種前(種子吹付処理または塗沫処理) 1.ばか苗等の種子消毒の注意事項を参照。	浸種前 (種子吹付処理または塗沫処理)	28	ルミビアFS
		移植前 育苗箱処理	1A 2B 4A 4A 4A 4A 4A 4F 5 5 28 28	グランドオンコル粒剤 プリンス粒剤 ダントツ水溶剤 ダントツ箱粒剤 アルバリン箱粒剤 スタークル箱粒剤 スターダム箱粒剤混合剤 リディア箱粒剤 スピノエース箱粒剤 ディアナ箱粒剤混合剤 フェルテラ箱粒剤 パディート箱粒剤 このほか以上を含む混合剤
		幼虫発生初期	1B 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 5 14 3A･4A	スミチオン乳剤 トレボン粉剤DL ダントツ粉剤DL ダントツH粉剤DL アルバリン粉剤DL スタークル粉剤DL スタークル粒剤混合剤 ディアナSC パダン粒剤4 (混)トレボンスターフロアブル このほか以上を含む混合剤
16 イネカラバエ	1.移植時期の遅い作型や窒素過多田で多発するので、肥培管理理に注意する。 2.晩期栽培は特にイネクロカラバエの被害が大きい。	移植前 育苗箱処理	1A 4F	グランドオンコル粒剤 リディア箱粒剤 このほか以上を含む混合剤
17 イネヒメハモグリバエ	1.健全な苗を植え、傷みを避ける。 2.深水管理は発生が多くなるので、できるだけ浅水管理にする。 3.畦畔雑草を処理して、越冬虫の密度を下げる。	移植前 育苗箱処理	1A 2B 4A 4F 28	オンコル粒剤5 プリンス粒剤 ダントツ箱粒剤 リディア箱粒剤 パディート箱粒剤 このほか以上を含む混合剤

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
18 カメムシ類	1.出穂期の雑草処理は水田への飛び込みを助長するので、出穂10日～１週間前頃に処理をする（斑点米カメムシ類）。 2.増殖源である雑草地や農道を含めて、広範囲に一斉除草すると効果が高い。 3.イネカメムシ、クモヘリカメムシは、水田に侵入した成虫が出穂後の穂を吸汁することで不稔も引き起こす。 4.ミナミアオカメムシは早期、短期栽培で増殖し、普通期栽培での発生が多い。また、水稲で増殖できるために発生期間が長く、斑点米を発生させる能力も高いので、黄熟期以降の発生にも注意する。 5.ミナミアオカメムシはひこばえで増殖するので、早期、短期水稲を刈り取った後のひこばえをすき込む。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.イネクロカメムシは主に株元で生息しているので、薬剤が虫体に十分付着するよう、ていねいに散布する。 2.イネクロカメムシが多発生した場合は、６月中旬までに防除する。 3.イネクロカメムシの発生が少ない場合は、額縁防除（畦畔から１m以内を防除）でよい。	移植前 育苗箱処理 (イネクロカメムシ)	2B 4A 4A 4A	プリンス粒剤 アルバリン箱粒剤 スタークル箱粒剤 スターダム箱粒剤 このほか以上を含む混合剤
		イネクロカメムシ：分けつ期～出穂期 斑点米カメムシ類：出穂期～乳熟期 斑点米カメムシのうち ミナミアオカメムシ：出穂期～黄熟期	1B 2B 2B 2B 2B 3A 3A 3A 3A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4C 4C 4F	スミチオン乳剤 キラップ粒剤 キラップフロアブル キラップ粉剤ＤＬ キラップ豆つぶ混合剤 トレボン乳剤 トレボンＥＷ トレボン粉剤ＤＬ トレボンＳＥ混合剤 ダントツ粒剤 ダントツフロアブル ダントツ粉剤ＤＬ ダントツＨ粉剤ＤＬ アルバリン粒剤 スタークル粒剤 アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤 スタークル液剤１０ アルバリン粉剤ＤＬ スタークル粉剤ＤＬ スタークル豆つぶ スタークルフロアブル混合剤 エクシードフロアブル エクシード粉剤ＤＬ エミリアフロアブル このほか以上を含む混合剤
		休耕田 ヨシ、オギ、ススキ、セイタカアワダチソウ等の多年生雑草が優占している休耕田で斑点米カメムシ類対象に散布可能な薬剤	1B 2B 2B 3A 3A 3A 4A 4A	スミチオン乳剤 キラップフロアブル キラップ粉剤ＤＬ トレボン乳剤 トレボンＥＷ トレボン粉剤ＤＬ ダントツ水溶剤 ダントツＨ粉剤ＤＬ
19 イネゾウムシ	1.稚苗移植栽培で被害が多いので、多発地では中苗移植栽培が望ましい。 2.山間地帯で発生が多いので注意する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.育苗箱に苗の上から均一に散布する。	移植前 育苗箱処理	1A	ガゼット粒剤
		発生期 (田植後～２週間)	3A	トレボン粒剤
20 イネミズゾウムシ	1.早期水稲に発生しやすいので注意する。 2.ネザサ、チガヤ、ススキ等、イネ科雑草に食害痕がないか調べ、早期発見に努める。 3.移植の早い水田に集中するので、一斉に田植えする。 4.健苗を育てる。 5.根腐れは幼虫の被害を助長するので、深水を避け、根が健全に育つようにする。 **〈薬剤使用の特記事項〉** ●浸種前(種子吹付処理または塗沫処理) 1.ばか苗等の種子消毒の注意事項を参照。	浸種前 (種子吹付処理または塗沫処理)	28	ルミビアＦＳ
		播種時 育苗箱処理	28	パディート箱粒剤
		移植前 (越冬成虫及び幼虫) 育苗箱処理	1A 1A 1A 2B 4A 4A 4A 4A 4A 4A 4A	ガゼット粒剤 オンコル粒剤５ グランドオンコル粒剤 プリンス粒剤 アドマイヤー顆粒水和剤 アクタラ箱粒剤 ダントツ箱粒剤 ダントツ水溶剤 アルバリン箱粒剤 スタークル箱粒剤 スターダム箱粒剤

農薬の使用方法や注意事項はラベルで確認する

水稲

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
	〈薬剤使用の特記事項〉 ●移植前、育苗箱処理 1.縞葉枯病の項の散布方法及び注意事項を参考にし、適正に使用する。 ●直まき栽培、播種前（湿粉衣） 1.過酸化カルシウム剤と同時湿粉衣する。 ●本田初期 1.防除の目安：越冬成虫密度で株当り0.3～0.5頭（育苗箱施用を行っている場合は0.5頭）である。 2.施用後１週間はかけ流しや落水をしない。 3.越冬成虫の移動盛期（５月中旬～下旬）に移植する作型では、特に減収しやすいので注意する。 4.パック剤等の注意事項は、普通作物参考５参照。		4F	リディア箱粒剤
			9B	チェス粒剤混合剤
			28	パディート箱粒剤
			28	フェルテラ箱粒剤
			28	ヨーバル箱粒剤
			UN	アレス箱粒剤
			4A･5	（混）ガードナーフロアブル
			28･9B	ミネクトスター顆粒水和剤
				このほか以上を含む混合剤
		直まき栽培 播種前 （湿粉衣）	4A	アドマイヤー水和剤
		本田初期	3A	トレボン粒剤
				このほか以上を含む混合剤
		５葉期以降	3A	なげこみトレボン
21 イナゴ類 （ハネナガイナゴ）	1.代かき時に、畦畔近くに吹き寄せられる卵鞘をごみとともにすくい集めて、処分する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.本虫を対象に防除を実施しているところでは、バッタ類の発生が少ない。	移植前 育苗箱処理	2B	プリンス粒剤
			4A	スターダム箱粒剤
			4F	リディア箱粒剤
			28	パディート箱粒剤
			UN	アレス箱粒剤
				このほか以上を含む混合剤
		発生初期	2B	キラップフロアブル
			2B	キラップ粉剤ＤＬ
			3A	トレボン乳剤
			3A	トレボン粉剤ＤＬ
			4A	ダントツフロアブル
			4A	ダントツＨ粉剤ＤＬ
			4C	エクシードフロアブル
				このほか以上を含む混合剤
22 スクミリンゴガイ （ジャンボタニシ）	1.発生圃場では、厳寒期に２回以上圃場を耕起する。貝は土の表面から５cm以内の浅い部分に潜っているので、トラクターの耕起深はできる限り浅く、ロータリーの回転数は高く、走行速度は落として耕起する。代かき専用ロータリーを使用するとさらに効果が高い。 2.水路からの貝の侵入を防ぐため、取水口に９㎜目合い程度のネットや金網を設置する。藻やゴミがつまる場合は、玉ねぎネット等でふきながし状にするとよい。 3.圃場内及び周辺水路の貝や卵塊を除去する。稲を食害するのは殻高15㎜以上の貝で、食害期間は移植後２～３週間までなので、特に移植直前から移植後２～３週間は圃場内の貝を重点的に拾い取る。 4.水深が深いほど被害が大きくなるので、移植後２～３週間はできる限り浅水（１cm程度）に管理する。また、圃場の一部が深くならないように、圃場をできる限り均平に保つことで効果が高くなる。 5.発生地帯では直播栽培は避ける。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.パダン粒剤４の使用上の注意事項 ・パダン粒剤４は食害防止剤であるため、食毒による殺貝剤（スクミノン、ジャンボたにしくん等）と同時に使用しない。併用する場合には、食害防止剤（又は食毒による殺貝剤）の効果が切れてから使用する。 ・パダン粒剤４を施用後、活動している貝の密度が高い場合には、必要に応じて追加防除を行う。 2.石灰窒素は商品によっては、刈取り後の登録が無いので注意する。 3.石灰窒素の使用方法 ・散布に当たっては、３～４cmに湛水し、１～４日後全面に散布、３～４日放置する。 ・収穫終了後の水田を湛水し、土中の貝のほとんどが水中へ出て活動を開始した時点で散布する。なお散布が遅れ、水深が浅くなると貝が再び土中へ潜り、効果が劣る。 4.石灰窒素の使用上の注意事項 ・散布作業中の飛散による他作物への被害防止のため粒状石灰窒素を用い、散布に当たっては風のない日を選ぶ。 ・漏水により、水路等へ薬液が流出するおそれのある場合には使用しない。 ・散布後に台風や大雨が予想される場合は、使用しない。 ・隣接圃場に薬液が流出すると、作物に薬害が発生するおそれがあるので、散布は周辺圃場が作物を収穫した後に行う。 ・死亡した貝により強い腐敗臭が漂うので、人家の近くでは使用に注意する。 ・水温が高いほど殺貝効果は優れるので、散布は水稲収穫後できるだけ早い時期で水温の上りやすい晴天の日を選ぶ。	湛水直播栽培 播種後	－	スクミノン
			－	ジャンボたにしくん
		移植直後～ 移植後３週間	14	パダン粒剤４
			－	スクミノン
			－	ジャンボたにしくん
			－	メタレックスＲＧ粒剤
		移植直後～ 移植後３週間 （発生時）	－	スクミンベイト３
		刈取後 （水温15℃以上の時期：９月中旬～10月下旬）	－	石灰窒素５０
			－	石灰窒素５５
			－	粒状石灰窒素４０
			－	粒状石灰窒素５５

農薬の使用方法や注意事項はラベルで確認する